

医療の立ち位置

医療法人社団慈佑会 方波見医院

方波見 康雄

医療は、すべて「公」である

自分が病気になったときのために医師という職業を選んだというお医者様は、まずいないでしょう。医療はそもそもが、病に苦しむ者に思わず手を差し伸べようとする人間本来の情意、つまり他者の苦しみや悲しみへの共感と想像力という普遍的な人間性である「他者性」の認識に由来しているからです。人はすべて、「他者ありて私は誰かの他者になる」（折出健二、ほっとブックス新栄）という生きものなのです。

この「他者性」を、チンパンジーのアイをパートナーとして研究している松沢哲郎教授（京都大学）が、霊長類学と比較認知科学の視点から、こう解説しています。

「人間には、他者の経験や苦しみや悲しみ、痛みなどを想像するちからがある。他者の経験を自分の血肉にし、他者の痛みがわたしの痛みになり、他者の喜びがわたしの喜びになり、そして心に愛が生まれてくる生きものなのである。これはまた、長い進化の歴史の過程で生まれてきたものである。

チンパンジーは、目の前のものを一瞬で記憶する能力では人間よりすぐれているが、人間のような「他者性」を持ち合わせていない」（『分かちあう心の進化』岩波科学ライブラリー 274、岩波書店）。

ちなみに松沢教授は、京大で哲学を専攻した理学博士です。

かつて私は、ある大学の通信教育の科目選択として「古代ギリシャ哲学」「フランス哲学」「論理学」などを勉強したことがあります。その乏しいポキャブラリーから、私見を述べると、こうなります。

「人間存在の内奥には「他者」がある。他者との関わりなしに「私」という実体は存在し得ない。

他者の悲しみや痛み、苦しみは、人間存在の根源からの、つまりは己れ自身の内奥からの呻き声でもある」

ここでいう「他者」とは、人間だけではなく、自然世界の生きとし生けるもの、生態系のすべて、路傍の石ころ、川のせせらぎや風の音などの1/fのゆらぎ、過去・現在・未来の時の流れなども含むことを付け加えておきます。

この小稿でいう「公」とは、こうした普遍的な人間性への貢献とその共有を基礎とした社会的機能を意味するものです。「医療は、すべて「公」である」の根拠もまた、ここにあるのです。この医療には、医療法での専門職とともに、リハビリ専門職や福祉

と介護の専門職種も含まれています。

この「公」について考えさせられた、ある患者家族の体験談があります。

「5年ほど前に、ある都市在住の40代の女性が脳出血のため、市内の国立病院に救急搬送された。そしてやがて術後のリハビリを受けようとしたとき、年末年始の休暇のために病院はすべてお休み。大切なリハビリ開始は休み明けにされた。不信にかられた家族は、市内の法人病院に転院させた。そこでのリハビリは休日皆無、若い女性リハビリ療法士が、優しく厳しく、この患者の訴えに耳を傾けながら、患者の内発性を促すようリハビリをしてくれた。いまでは失語や半身不全麻痺も回復、希望のある日々を過ごすようになっていく」

この場合、私的な法人病院が「公」の機能を果たしていたこととなります。国立病院は設立主体が国立という、ただの「官」にすぎず、「官」イコール「公」ではない、ということになってしまいます。

医療は、「国立」「道立」「自治体立」、私的な医療法人や開業医診療所であっても、設立主体が違っただけで、すべてひとしく「公」の意味を共有しているのです。また大切なことは、その病院内あるいは診療所内の連携機能と、個別の職員の人間的な資質と学習姿勢も、「公」を担うということです。

「医療は、社会的共通資本である」とは国際的に高名な経済学者であった宇沢弘文東京大学名誉教授（2014年没）の著書『社会的共通資本』（岩波新書）に書いてある言葉です。要約しておきます。

「社会的共通資本とは、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を安定的に維持・可能にする社会的装置のことである。一人一人の人的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を維持するために、不可欠の役割を果たす。

社会的共通資本のなかで、とくに大切なのは教育と医療である。医療は医学的な知見にもとづいて、診察・治療をおこなうものであるが、教育と同様に、市場原理や官僚的基準によって管理・支配されてはならない。職業的専門家により、専門的知見にもとづき、職業的規範にしたがい管理・運営されなければならない」

この小稿で述べた「公」は、宇沢教授の「社会的共通資本」と意味を同じくしていることとなります。

ところで、「公」とは英語のpublicに相当する言葉です。そして英語文化の発祥の地である英国で「public school」といえば、イートンやラグビーなどの伝統名門校をすぐに思い浮かべますが、このどれもが私立の中高一貫校なのです。このように「public」には、多様な意味合いが含まれているのです。

40年ほど前、英国やアイルランドのホスピス視察に行ったとき、ダブリンのpubで飲んだ黒ビールが

すごく美味しかった。このpubは、public houseの短縮形。つまり居酒屋を誰にでも自由に開放された地域社会の集会場と考えれば、publicに通じ、「公」の役割を果たしているということなのでしょう。

ヨーロッパでは17世紀ごろから、音楽会の聴衆や観客あるいは読書する人びとを、〈文芸的公共性〉を共有する市民という概念でとらえていました。実際Oxfordの辞書で調べると、publicには「音楽会の聴衆」の意味も含まれていました。

「公」という言葉のこうした多元性を、臨床医療の現場で活用したいものです。医療は、言葉と感性・想像力の文化でもあるのです。「科学と詩学のデュオ」と言っても、よいでしょう。こういう認識が、医療の「公」を捻り豊かにしていくことでしょう。

医療の立ち位置

話が、私の父そして母という、私事にわたることをお許しいただきたい。

晩秋のある日、山本ミヤ子さん(78歳、仮名)が受診に訪れたおり、町外の施設で102歳の天寿を全うした老母ハツさん(仮名)の思い出話をしました。ハツさんもまた、施設入所の5年前までは、当院をかりつけ医としていたのです。あらましこういう内容でした。

「母は貧しい農家育ちで、生涯裕福な生活とは縁遠かった。昭和10年ごろ、いまのような健康保険が無かった時代に、病気になって困ったのは医療費が払えないことだった。でも先生のお父さんは、お金のことは一切口にしなかった。具合が悪くなると、夜でもニコニコしながら診療してくれた。

ある夕方、8歳の長男が熱を出し、母は、幼い子どもを2人も連れて受診した。そのとき、先生の奥さんが晩ご飯をご馳走してくれ、2人の子どもをお風呂にも入れてくれた。わが家だけではない。貧しくて困っている人には、みんな同じようになさっていた。あの世に行ったら、いちばん先にお礼を言いたい」

話を聴きながら、こう思いました。

あの時代に、北海道の、あるいは日本の、さらには世界のどこにでも、同じような医師が、数多くいたはずだ。医療にいそしむにつれ、医療が内包する「公」つまり「公共性」が、おのずとそのような心構えを医師に培ってくれたのだろう。「公」としての医療には、「他者性」を大切にするという教育機能があるのだ、と。

両親については、私がまだ幼かったころの、こういう記憶も鮮明に残っています。

ある夜遅く、わが家の玄関を、音をひそめるようにして叩く人がいた。赤い腰巻きをまとった屈強な体格の若い男であり、裸の上半身は傷だらけだった。そのころ河川工事に強制使役されていた労働者であった。たぶん厳しい監視の目をくぐって逃げ出し、

医院であるわが家に、キリスト教会にでもすがるといふ思いでたどりついたのであろう。幼い私には、息が詰まるような場面であった。

しかし母も父も、穏やかに彼の言い分を聞くと、そのまま中に招き入れ、入浴させ、寝室を用意した。翌朝早く男は、無言のまま姿を消していた。

母は、こう言っていた。「お布団を、きれいに畳んでおいてあった。礼儀をわきまえているのね。犯罪者でもないのに、朝鮮の人は、かわいそう」

さてここで、「医療の立ち位置」について考えてみることにします。

医療とは、「分かちあう心の進化」つまりは人類文化が創り出したものです。その基本には、松沢教授の言葉を借りると、「人間が互いに分かちあい、思いやり、慈しむ、想像するちからがある」ということになります。言葉を換えると、「分かちあう」とは、相互主体的な互恵関係から芽生えてくるものだ、ということになります。

医療そして医療者の立ち位置とは、病める者つまりは「弱き者」「苦しむ者」「いと小さき者」、さらには「差別に苦しむ者」「虐げられた人びと」からも「互恵の恵み」を受けている立場に身を置いている、ということでもあるのです。医師あるいは医療者は臨床の現場で、受診する患者さんからも「恵み」を受ける立場に絶えず身を置いているのです。「患者に学ぶ」とは、こういうことなのでしょう。この「互恵関係」は、市民社会もまた〈文芸的公共性〉と同じく、自覚した参加型の〈医療的公共性〉として共有すべきものでしょう。

地域医療や地域ケアの連携を支える土台には、小稿で述べてきた「医療はすべて公」という認識の共有と「医療の立ち位置」の深化と熟成が大切と考えています。

そしてまた大切なのは、こうした視点からの社会的政策的な批判精神でしょう。

医師人生66年、齢を重ねるにつれ、医療という「科学と詩学のデュオ」が奏でる楽想の奥行きに魅せられています。

北海道医報1200号継続の歴史に敬意を捧げ、会報の豊かな発展を期待しています。